

『旅人 (04/05)』

旅人は問うた
私は進化の途中かと

旅人は問うた
人は進化の途中かと

心も進化の途中かと
心も進化の途中かと

一人星空へ問うて見た
一人深閑の中で問うて見た

心も進化の途中かと
過去の進化が今の心かと

旅人は問うた
私は進化の途中かと

『路 (04/08)』

雪のように
花弁が積もり
その路を私は歩く

風が吹いて
花弁が乱舞し
その路を私は歩く

私の夢も
私の人生も
乱舞の中なのだろう

雪のように
花弁が積もった
その路を私は歩く

花弁を踏み締めて
ゆっくりと
一歩つづ私は歩きを刻む

風が吹いて
花弁は舞い上がって
人生を見せる

『波 (04/08)』

波のごとく
花弁が風に飛ぶ
波のごとく
花弁が陽に飛ぶ

人の中を
花弁は風とともに
過ぎ去っていく
花弁が世を流れ行く

花弁の舞いに
猫がじゃれつき
犬が吠え
人は路を振り返る

帰り路を
花卉の乱舞が隠し
人は再び前を見る
花が散った先を

波のごとく
花卉が風に舞い
波のごとく
花卉が舞い散っている

『雀 (04/08)』

陽を浴びた
柿の細枝に
雀は止まり
一羽二羽と
止まっては
囀っている

うるさいのは
車を通る音
うるさいのは
飛行機の音

うるさいのは
テレビの音

陽を浴びた
柿の小枝に
雀が止まり
二羽三羽と
止まっては
囀っている

静かなるのは
赤児の声
静かなるのは
せせらぎ
安らかなるは
陽の温もり

『樹 (04/09)』

花を咲かせて
樹木は立っている
葉を繁らせて

樹木は立っている

季節が来れば
梅が咲き
桜が咲き

季節が来れば
栗は実り
柘榴も実る

樹木は立っている
花を咲かせ
葉を繁らせて
樹木は立っている

嵐も有れば
雷も有る
吹雪も有る

季節が来る度に

日は暖かく
日は寒く

花を咲かせて
樹木が立っている
葉を繁らせて
樹木は立っている

『風 (04/09)』

風がひゅーひゅー
鳴いている
風がひゅーひゅー
泣いている

風よ何泣く
何で泣く
人でないあなたでも
悲しみは有るのか

風よ何泣く
何で泣く

哭を伝える
あても無いからか

ひゅーひゅー風が
泣いている
ひゅーひゅー風が
鳴いている

『毬 (04/09)』

花弁を集めて
毬を作りました
花弁を集めて
毬を作りました

毬は風に壊れて
青空へ舞った
毬は風に壊れて
青空へ舞った

春はいいですね
暖かいですね

春はいいですね
温いですね

花弁を集めて
毬を作りました
風に壊れて
青空へ舞い散った

『乱舞 (04/11)』

夜に一陣の風が吹き通り
桜並木は花の舞い
あれは夜叉が通る兆し

雪洞が激しく揺れて
花弁が乱舞の中を
夜叉が今を通りすぎていく

桜に散った命を吸いながら
口を鮮血で真っ赤にし
眼を光らせて夜叉が通り行く

おろろろおろろろ
 息子はあの戦争で
 天皇陛下に命を捧げると
 遠く異国の地で死んでいきました
 桜の開花を見ることもなく
 おろろろおろろろ

お母さま私が散っていくのに
 桜が散らないなんて悲しいですよ
 散れ！ 桜の花よ
 散れ！ 桜の花よ
 散れ！ 桜の花よ
 お母さま 悲しまないでください

おろろろおろろろ
 息子を産んだ母親は
 夜叉となって花吹雪の中を
 通り去っていく今を去って行く
 おろろろおろろろ
 朱の口から血を滴り落としながら
 一陣の風とともに夜叉が去って行く
 眼を光らせて夜叉が透り行く

口を鮮血で真っ赤にし
 桜に散った命を抱きながら

あれは夜叉が通る兆し
 桜並木は花の舞い
 夜に一陣の風が吹き透る

『桜 (04/11)』

桜の花は綺麗ですか
 桜の花は美しいですか

桜の樹の下には
 沢山の屍が埋まっているを
 知っているのでしょうか

昭和の御代には
 「身ヲ鴻毛ノ軽キニ置キ、聖恩ニ報奉ツ
 ル」って
 正気として通りましてね
 沢山の若者が醜の御楯ゆえ

屍になっていきました

夜桜宴の最中に
 亡き長男の名前を呼びながら
 老婆が突然狂いまして
 病室の壁へ頭を下げながら
 何度も何度も長男に謝っていました

「自分の生命は鳥の毛ほどの軽いもの
 ある
 天皇の聖なる恩に報いるため命を捨て
 なさい」

昼に桜並木の下を歩いても
 夜に雪洞に照らされた
 夜桜の下を歩いても

愛でる気持ちにはなれないのです
 戦後の生まれですがね
 酔うほどに心痛がしてくるのです

桜の花は綺麗ですか
桜の花は美しいですか

『御霊 (04/11)』

桜に誘われて
桜名所は何処も人集りです

千鳥が淵の桜が
風に舞っています
青空中へと
花卉が飛んでいます

あれは鎮魂の舞なのか
恨哭の響音が聞こえるのです
あれは死者の語りなのか
終の住み処へ去った者の音か

靖国神社の桜が
風に乱舞しています
青空の中へと

花卉が飛んでいきます

桜に誘われて
桜名所は何処も人集りです

『四月 (04/18)』

四月のどんよりした空は
心が彷徨う季節です
新緑が日に日に大きくなって
わくわくしてくるのですが
冷たい風が吹いたり
チュリップが
激しく風に揺れていた
不安のが顔を出すのです

梅の実も大きくなって
それとわかるし
桜の葉が陽に緑をそえているし
どんよりした空の下には
新しい息吹が芽生えているのです

四月は心が彷徨う季節なのですね
陽に新緑は初々しく照り返り
そうかと思うと
冷たい一陣の風に咲いた花が
激しく揺れていた
門出と不安の入り交じった
月日なのですね
きつと空の意地悪なのでしよう

『老人 (04/19)』

長椅子に腰かけている
老人と視線が合った
なにかを哀願するような
優しさと遠慮の

四〇五分で戻ってきたら
老人はそこに横たわり
脈は無かった
目を開いたまま静止していた

十五分も経つと
死など無かったように

多くの人々がそこを
往来し腰をかけている

『自転軸 (04/20)』

寝静まった街は
街灯に照らされて
時が過ぎるのを待っている

時が過ぎて行けば
再び朝が来ると言うのか
時間が刻々と経って行けば
いつもの通り
夜が明けるといふのか

時間は人間の尺度なのだ
人間の権利を主張するため
神の大地を人間のにするため
人は時間と言語を持った
人は記述に時間尺度を用い
文明を成してきた

時が過ぎても
朝は来ないでしょう
時間が刻々と経っても
夜は明けないでしょう
時が過ぎてもね

朝が来るのは
全く時間と関係ないのです
地球が自転していて
太陽の面へあたり始めると
あたりが明るくなり
陽が昇り朝が来る

日が昇り日が沈む
地球が自転している証であり
人はそれを時間で測った
文化は文明となり
文明は回転駒となり自転している

朝が来るのを待っている
街灯に照らされて
寝静まった街が

『午前二時 (04/26)』

月が煌々と
眠る街を照らしている

信号の赤が
路上に映り
緑が映る

車を通り
バイクが通り
救急車が行く

女も歩き
男も歩く
眠る街を

何って五月蠅いのだ
深閑の街も

『生死 (04/27)』

生きている
それゆえの苦悩か
生きている故の
苦しみの涙か
お前の流す涙は

そんなものだろうなか

永遠の眠りは
それゆえの安眠か
苦悩に戻らぬ
それゆえの安眠か

人の苦しみは
そんなものだろうなか
人の流す涙も
そんなものだろうなか

End all 1997/04

死者には涙もなければ
死者には苦しみも無いのか

死者には喜びもなければ
死者には感動も無いのか

人の死とは
そんなものだろうなか
息をしなくなるとは